会員研究

間宮林蔵の先祖　間宮氏の流れ

竹村紘一

間宮氏の出自

間宮氏は近江の出身で、宇多源氏佐々木氏の分かれという。佐々木氏の場合、源頼朝に仕えて活躍した佐々木秀義（源為義の娘婿）の息子の定綱や高綱等の兄弟が有名であるが、間宮氏の先祖といわれる佐々木氏は分家で沙沙貴神社宮司家となった家系が、再び武家化したと伝えられる。すなわち、佐々木兵庫助経方の子・萬石行定（まんごくゆきさだ）の子・行範（ゆきのり）が間宮氏の直接の祖といい、行範の孫にあたる時信は船木六郎を称し、信時の五代の孫・信冬が間宮新左衛門尉を名乗ったのが間宮氏の始まりであるとされる。南北朝の時代、伊豆国田方郡間宮村に移り、間宮氏を称した。時を経て、北条早雲（伊勢宗瑞）に従い永正七年（１５１０）、権現山の戦いで上田政盛の麾下にあり、敗れるも奮戦して戦功を挙げ、その後は早雲の相模国平定を助け厚い信頼を得る。

間宮氏発祥の地は伊豆国田方郡間宮村とされる、信冬は近江より伊豆に下り、間宮氏を称したということになる。そして、その時代は南北朝時代の頃であったと推測される。その後、間宮氏は相模・武蔵に移ったとされるが、その経緯については不明な部分が多く明確ではない。

権現山の戦い――間宮氏の登場

永正七年六月、越後長森原の戦いにおける管領山内上杉の当主顕定敗死の情報は電撃的に関東にまで伝わった。越後へ攻め入り長尾為景と戦っていた顕定（顕定の実弟で越後守護を務めていた上杉房能が守護代長尾為景を主力とした上杉定実軍に追われて自刃したことへの報復と考えられている）はその強硬な支配姿勢から越後の人心が得られず撤兵せんとするが、長森原での戦いで為景の援軍である高梨政盛に敗れ自刃したとも討ち取られたともされる、そこには管領塚がある。それを、好機と見た北条早雲（伊勢宗瑞）は俄然動き出した。永正年間（１５０４～１５２０）の初め頃から、小田原を本拠に勢力を武蔵に伸ばし始めた北条早雲で、それまで顕定の存在によって容易に関東進出が果たせないでいたので漸くその重石が取り除かれたのであった。

早雲は、まず、扇谷上杉朝良（定正の養嗣子）の家臣上田政盛を寝返らせるのに成功し，修築したばかりの権現山城に城将として上田政盛を入れた。上田氏は武蔵七党の西党の系統で、扇谷上杉氏の家臣の家系と伝えられる。早雲は、それまでは、両上杉氏を分断すべく、扇谷上杉家と懇親を深め、山内上杉氏と対抗していたが、いよいよ本来の方針である両上杉家氏の打倒に乗り出したのであった。早雲の野望に漸く気付いた両上杉氏も、従来の行き掛かりを水に流しここに手を結び、新興勢力の北条氏に対抗することになったのであった。

このことから、それまで反目しあっていた扇谷上杉氏と山内上杉氏は共同の敵・早雲と戦うために結ぶことになったのである。ここに、長享の乱以来続いてきた伊勢氏（後の後北条氏）と上杉氏との同盟関係が完全に破綻して以後の両者は関東の覇権を巡って激しく争う事になった。

顕定の後を継いだ山内上杉憲房は成田・渋江・藤田・大石氏らの兵二万騎をもって上田氏の居城である権現山城を攻撃させた。両上杉氏の大軍に対して上田政盛は果敢に戦い激戦が展開されたが衆寡敵せず上杉勢は権現山城に攻め込んだ。

その時、城中より「われこそは、相模の住人間宮の某」と叫びつつ上杉勢に突入した勇ましい武士がいた。この間宮某こそ、間宮氏の中で史料的に裏付けられる初めの人物である。この間宮某は、信冬もしくはその子の信盛と伝えられ、川崎の堀之内城にいて北条早雲が相模東部に進出すると、いち早くその家臣となったものである。ただ、信冬と信盛の間には系図上に断絶があるが、間宮某は信盛であり信冬の血脈に連なる人物と推測される。戦いがあったのはその年

の七月で軍勢の数に勝る両上杉軍は権現山の奪取に成功し，早雲は敗れて兵を退いたのである．それまでは、破竹の勢いだった早雲が関東進出の途上で味わった大敗北であった。

間宮氏の勢力拡大とその後

杉田の東漸寺にある『間宮教信覚書』には、永正年間に信冬の子・信盛が杉田郷へ移ったとある。おそらく、信盛は権現山城の戦いの後に、杉田に落ち延びたのであろう。北条氏に仕えた間宮氏は笹下城を居城としたことが知られている。笹下という地名は、佐々木を後に佐々気と書き、さらに佐々下＝笹下と転訛したのだという。佐々木間宮氏は古くから鎌倉周辺に居住し、戦国時代に笹下に本拠を移し勢力を拡大していったのだともいう。ちなみに、現在の鶴見区下末吉にある宝泉寺は永正五年（１５０４）に間宮信冬が開基したと伝え、永禄二年（１５５９）に成立した『小田原衆所領役帳』に、信冬の子孫にあたる康俊が末吉を知行していることから、この伝えはほぼ信頼出来ると解される。間宮氏は長年の戦功を評価され鎌倉北方の笹下（横浜市港南区）を得る。この後、笹下城を築き、本拠を移し、勢力を広げていく。笹下城は、北条家と敵対していた房総の里見氏に対峙する城でもあった。そして、間宮家は、沿岸防備を任され北条水軍を率いる水軍の将となり、小田原本城の有力支城として玉縄城主・北条氏勝の支配下に入る。

房総の里見氏の監視が主な役目だが、北条氏綱（早雲の嫡男）の娘婿で足利一門の武蔵（東条）吉良氏の頼康の居城である蒔田城及び吉良氏の領地を守ることも重要な役目であった。北条氏の勢力が安定するまでは、足利将軍家の一門である名門吉良氏との縁があることが、関東支配の上では非常に重要であった。間宮家は、軍事力でも優れ行政力もあり相模衆十四家の筆頭となり、北条氏勝家老として、職務に尽くす。

北条氏が相模東部へ侵攻を始め、武勲を挙げ勇名を轟かせ重臣となる。支配地は磯子（横浜市磯子区）付近まで伸び、笹下城を中心に数箇所に支城を築き、善政を敷き領民から慕われた。間宮一族は自然の地形を取り入れ築いた支城に杉田・中里・森・氷取沢などの分家を配して守りを固めた。

間宮氏の勢力拡大とその後

大永年間（１５２１～１５２７）に現在の横浜市域は完全に北条氏綱の支配下となり、北条氏に仕えた間宮氏の勢力も磯子区域に伸張して行った。信盛の子・信元は天文年間（１５３２～１５５４）に笹下城を築き、東樹院を再建し、若宮八幡宮・安房洲神社・御霊神社を城の近くに創建した。

間宮氏は信盛の後、杉田間宮・笹下間宮・氷取間宮などの系統に分かれた。信盛の跡を継いだのは嫡男の康俊で豊前守を称し、玉縄城の北条綱成（（北条氏綱の娘婿で氏康の義弟。地黄八幡の旗印で有名を馳せた勇将）に属して重臣の一人に列した。

康俊の知行は『小田原衆所領役帳』によれば、笹下城を本拠に、杉田・小雀・末吉・川崎、さらに遠く国分・富屋・不入斗を領した。当時の貫高制に換算して七百貫で、軍役高にすると足軽も含めて約二百人で、北条家中の中堅武将に位置していた。

康俊には綱信・信俊・信吉の兄弟があり、綱信は分家して氷取に住んで氷取間宮氏の祖となった。これら間宮一族は天正十八年（１５９０）の豊臣秀吉による小田原城攻撃に際して、北条氏に属して箱根峠の山中城で奮戦し、康俊は討死を遂げている。

山中城の激戦と援将間宮康俊の討死

山中城は、箱根山中腹の標高五八〇メートルにある戦国時代末期の城郭。小田原城を本城とする後北条氏が、箱根道の制圧と、領国の国境警備を目的として築いたもので、軍事的性格の強い城であった。昭和九年、国の史跡指定を受け、昭和四八年から、約二〇年間にわたって発掘調査と環境整備が行われ、現在、史跡公園として一般に公開されている。

この山中城が歴史の舞台に登場するのが、天正一八年（１５９０）、豊臣秀吉との間に行われた山中城合戦である。天下統一を目指す秀吉は、その総仕上げとして後北条氏の征伐に向かった。

三月二九日、早朝、山中城を豊臣軍約七万人の軍勢が取り囲んだ。右翼に堀秀政以下二万人、左

翼に徳川家康以下三万人、そして中央に総大将の豊臣秀次以下、その麾下の宿老衆の中村一氏、一柳直末、山内一豊、堀尾吉晴・田中吉政等、総勢二万人と三手に分かれて布陣した。

これを迎え撃つのは、守将北条氏勝（玉縄城主）、城将松田康長、援将として間宮康俊以下、約四千人の将兵であり、彼我の兵力さは極めて大きかった。また、豊臣軍の進出が早く準備不足もあった。

戦いは岱崎出丸（だいさきでまる）と西櫓から開始され、壮絶な銃撃戦が展開された。秀次軍の先陣を切った一柳直末は三の丸櫓門にて激しい銃撃を受けて壮絶なる戦死を遂げたが、二番手の中村一氏は岱崎出丸に執拗な攻撃を繰り返し、その家臣渡辺勘兵衛が一番乗りを果たして岱崎出丸が落ちると戦いの場は二ノ丸、本丸へ移り、圧倒的な数の前に守備兵は壊滅、城主松田康長も戦死して、正午過ぎには山中城は落城した。少なくも二三日は持つと思われた山中城の予想外に早い落城に北条氏は驚くと共に落胆したという。両軍の戦死者約二千人ともされ、戦国時代最大の攻城戦と言われている。

城攻めは、攻める側の被害が甚大であるため、山中城に見られるような力攻めはしないのが通常であるが、力攻めに踏み切ったのは、長久手の戦いの汚名を雪ごうとする秀次の決死の覚悟があったものと推測される。さらに、関白殿下である秀吉の見ている前で、功名を上げようとする秀次の宿老達の奮戦があったからだと思われるのである。天下の形勢は既に決しており、彼らには、この戦いが功名を上げられる最後の場となるかもしれないという思いがあったのであろう。

一方の守備側の康俊は、間宮信元の男子で、天文九年（１５４０）の生まれと伝えられる。受領名を豊前守と称し、号して宗閑。『小田原衆所領役帳』では「玉縄衆」にその名が伝えられ、武蔵久良岐郡杉田、相模東郡小雀などに六百九十八貫の知行高を有した。秀吉の北条攻めに備えて伊豆山中城に松田康長らと共に籠城、天文十八年（１５９０）三月二十九日、豊臣秀次勢の一柳直末や中村一氏等の猛攻で城は落とされ、間宮康俊は弟・信俊、源十郎（信冬か）と共に討死した。

山中城曲輪跡の宗閑寺には間宮三兄弟の墓が建つが、この寺は間宮康俊の娘・お久（その後、徳川家康の側室になる）が菩提を弔うために建立したものである。ここには寄せ手の大将一柳直末の墓もある。両軍の戦没者が祭られているのである。

その後の間宮氏

お久の方の直訴で間宮家は家康に好印象を与え、お久の方が側室になると、間宮家は徳川家に召し抱えられた北条家旧臣の中で、優遇された。北条家旧臣は、望んでもなかなか家康家臣にはなれなかったのだ。関東を治めるうえで、この地に精通し領民の信望の厚い間宮氏を取り込む必要がありと召し抱えられ、以降、与えられた任務を勤め上げ有能な行政官として北条旧臣第一の地位を築いていく。そして一族の多くが旗本家となる。

本家、直元（康俊（やすとし）の孫）は旧領を引継ぎ印旛郡・千葉郡内千石。家康に新規で仕える北条家旧臣で、領地を減らされなかったのは異例であった。

康俊（やすとし）の弟、長男、正重は百石。三男、頼次は二百石。

間宮氏が家康より優遇されたのは、お久の方の功（小田原城に籠城している甥、間宮直元・弟、間宮元重らを助けたく、家康に付いていた一族を介して和議を結んで欲しいとの真摯且つ必死の覚悟の願いが家康の心を打ったこと）であった。優秀勤勉で忠勇無双の間宮氏を取り込むことの重要さを家康も考えたのであろう。

北条氏が小田原城を開城した後の間宮一族はそれぞれ独自の道を歩んだ。康俊の娘・お久は徳川家康の側室となり、その縁からか本家の康俊の孫の直元・高則らは徳川旗本に取り立てられ、また、康俊の弟の氷取沢間宮氏の綱信は、祖父・信元の旧領に近い地に五百石を得る。綱信の子・正重・重信・頼次らも徳川家臣となった。それぞれの子孫は中里・杉田・氷取沢に陣屋を構えてそれぞれ繁栄した。康俊の叔父、信次の家系は杉田間宮家。忠信・信繁と続き五百石。江戸幕府将軍家の初代の鷹匠頭として知られる。康俊の末子・元重。康俊の弟・信俊等々幾流もの旗本家が出来た。

間宮氏では樺太探検で有名な間宮林蔵（近藤重蔵・平山行蔵と共

に文政の三蔵と称される）は間宮康俊の子孫で間宮清右衛門系統の末裔という。林蔵の間宮氏は北条氏没落後、常陸国筑波郡に住んだ間宮氏の後裔という。また、『解体新書』を著した蘭学医の杉田玄白は、小田原開城後橘樹郡菅生村に住んだ杉田間宮氏の後裔と伝えられ同族である。なかなかに優秀で粘り強い一族であった。